

最近、江戸時代の伝説のアウトローとも言える国定忠治の壮烈な生涯をつづった本(『国定忠治』高橋敏著)を読みました。色々と考えさせられました。

忠治は、江戸末期、徳川幕府支配体制の悪政腐敗が極度に至り、社会混乱がますます強まる中で、その体制から離脱したアウトローとして、お上に徹底抗戦し、反骨を最後まで貫き通した人間です。同じ頃、お上の調和に努め、ハッピーエンドの

獄中寄稿④

生涯をまっとうした博徒、清水次郎長こと山本長五郎が実は支配者側からも非常にもてはやされ、映画、芝居、歌などでたたえられてきたのは誠に対照的です。

幕末に至るや徳川幕府の支配権力は、その末端の取り締まり機関に至るまで、ある時は穏和に、ある時は脅して、ある時は法の名による強制で「弱気を挫き強きを扶く」やり方を社会に横行させていきます。当然のこととして、賄賂をせびり取る腐敗現象が、社会のほころびとしてあらゆるところで露出していきます。

その「取り締まり」というなりふりかまわぬ事態は無宿の博徒や俠客も末端の手先としてとり込み、また博徒や俠客も甘い汁のために権力ににじり寄るといいうわゆる「二足の草鞋」を履くのが珍しくもなくなってきたといえます。

こうした時代や状況に至れば、権力側にとっては、大きな飢饉すらが、貪欲な私利私欲をむさぼる契機にすらなってしまう。現在、未曾有の不況の中で、公務員の腐敗、墮落が急増しているのと同じことなのでしょう。

そうした社会にあって、では何故国定忠治は毅然として、アウトローとして、俠道の俠道たるゆえんを貫き通せたのかということ。やはり、忠治の持つ人間性、人間味を抜きに語ることはできません。

忠治は当然、賭場のあがりやを厳しく徴収し、よその賭場も荒らしません。そして裏切者、対抗者とは妥協なき仁義なき抗争を相手の息の根を止めるまで、時には凶暴な狼すら想起させるほどの非情さでくり広げていきます。つまり、無宿の博徒の世界における約束事と、定めに対する姿勢は峻厳そのものです。しかし一方で有宿の空気に対しては限りなく温和そのものであり、まるで従順な羊のような面があります。堅気からは一物たりとも奪うことを許さず、また堅気の子弟が一存で自分になりたいたと訪ねて来ても許すことがなかったといえます。父母が来てどうしても頼まれれば受け容れたが、その場合も嫌がりそうな雑役に一日中こき使い、辛さに我慢できなくなる頃をみはからい、真面目に百姓をやるようわかりやすく丁寧に諭したというのです。

忠治が生活する地盤は、赤城山麓ですが、次第にそこが「根拠地」と

究極の絆、永遠の友情のもと

嗚呼!!

任俠ボルシエビキ

元赤軍派闘士が獄中で知ったホンモノの男と俠たち

田中義三



化し、権力や敵も簡単に手が出せない自治区「盗区」という状況になっていたようです。乾分を五、六百人持ち、「水滸伝」ばりの文武いづれかの優れた才能を持つ個性的な無頼の徒を集め一大アウトロー集団と化していったとのこと。忠治が居るだけでコソ泥や空き巣の類は姿を消してしまう治安の良さゆえに、無宿の博徒が仕切る「盗区」の方が、他のどの領地と比べても安全な地帯といわれたそうです。こうした事実の前に土地の人々は、自然に忠治をそれこそ、父の如く畏敬し、赤城山に足を向けて寝られないほどの状況だったといえます。

近世日本の三大飢饉の一つといわれる天保飢饉の折のことです。幕府の官吏として代官の職にあった者が書き残している公式文獻にまで「忠治のことを聞いて、恥ずかしさのあまり、顔面は真赤、背中は冷汗、穴があつたら入りたくらいである」と言わしめています。いわば阪神大震災におけるあの狭道界の人達の働きぶりを彷彿させます。

忠治が先頭に立って飢民救済活動

に奔走したため、赤城四周では飢餓が生じなかつたとまでいわれていきます。それは「弱きを助け強きを挫く」という任侠から、さながら義民の様相を呈してきたといえます。私財を投げうち百両の大金をつくり、二百もの米俵を積みあげたといわれています。

はるかに文明が発達した現在、有資産家は数多けれど、この一大不況といわれる社会状況の中でこれほどの「仕事」をやる人がはたして何人いることでしょうか。

その忠治も最後、徹底したアウトローとしての節操を守り抜き、権力の「法」の裁きの下で見せしめとされます。大観衆の見守る中で堂々と「磔」の刑となり、壮絶なそして華々しい生涯に幕を閉じたのです。

一般的に悪者とされている人がそんなに悪者ではなく、紳士の如く思い込まれてきた人が実は紳士ではなくとんでもない奴だった——この倒錯した現象がますます顕著になっているのが今の社会ではないでしょうか。この間、いわゆる狭道界を含めたアウトローといわれる人達を見

たり聞いたり、それと関連した本を讀む中でその思いをますます強くしています。

アウトローは公から見れば私、異端にすぎません。本質としてその存在は、必要な時は権力に最大限利用され、また誇張されて社会悪の象徴にされる時もあり、邪魔になれば容赦なくつぶされ、消されていくのです。常にその危機の中で命がけで生きていくしかありません。

しかし、そこは社会のあらゆる矛盾、ひずみの吹きだまりでもあるがゆえに、そのアウトローの実態を分析すれば、政治や経済を含め社会の状況、権力の動きそのものを根本から、奥の底から見とることもできます。

社会通念として、毛虫、ダニの如くされているのがヤクザ、暴力団といわれるものです。もっとも昨今は、世の中の大勢に迎合しないものは、左翼ですらそのように扱われていく風潮なのですが……。確かに私を知るだけでも、例えば本誌に、四十件に及ぶ婦女暴行をくりかえしていた組員が逮捕されたという記事も

ありました。その組員も組員ですが、まわりの人は、そうしたことを薄々なりとも知っていたはずですから、その組全体が狭道界で生きて行くには、何か人間的な根本欠陥があったとしか言いようがありません。先にも触れましたが、タイくんだりまで来て、幼い少年少女を日本からの顧客のワイセツの餌食にしたり、売春のあっせんや、薬物をしのぎとっているヤクザを見ると、こんな極悪非道が許されてなるものかと怒りがこみあげます。

また労働条件の改善や不当解雇と闘う中小零細企業の労働組合を襲撃するなどの蛮行を行う暴力団もあります。

かつて「山谷」やられたらやり返せ」の記録映画を撮影していた佐藤満夫氏は、その撮影開始直後に、手配師が所属していた組織の組員に刺殺されました。更にその遺志を引き継ぎ映画を完成させた山岡氏も山谷の路上で銃殺され犠牲となりました。社会の底辺で必死に働き生きている人々を暖かく見守り支え、広範な社会層に訴え、人間としての権利を得るために闘っている義人を刺殺し銃殺する輩どもが、いかに義理だ人情だ、狭道だとうそぶいても私は

●田中義三——一九四九年青森県三沢市に生まれる。一九七〇年三月、日航機「よど号」をハイジャックして北鮮に。一九九六年三月、「ニセドル」事件でタイ当局に拘束されて裁判。その後日本に送還され、本年二月、ハイジャック事件等で懲役十二年の判決を受ける。現在、東京拘置所在監中。

絶対に許すことが出来ません。しかし、中には、そうしたことには一切かわらない俠道界の人達もいるはず。むしろ、権力を背景に法の盲点をかいくぐり、悪い金もつけをしている巨悪に敢然と挑んでいく「強きを挫く」のを旨としたり、たとえ社会の正道なるものからはずれても法なるものを犯すことがあっても「人間としての道に逆く非道は歩まず」という信念を抱いて、自分なりの生きる道を極めていく人達もいるのではないだろうか。

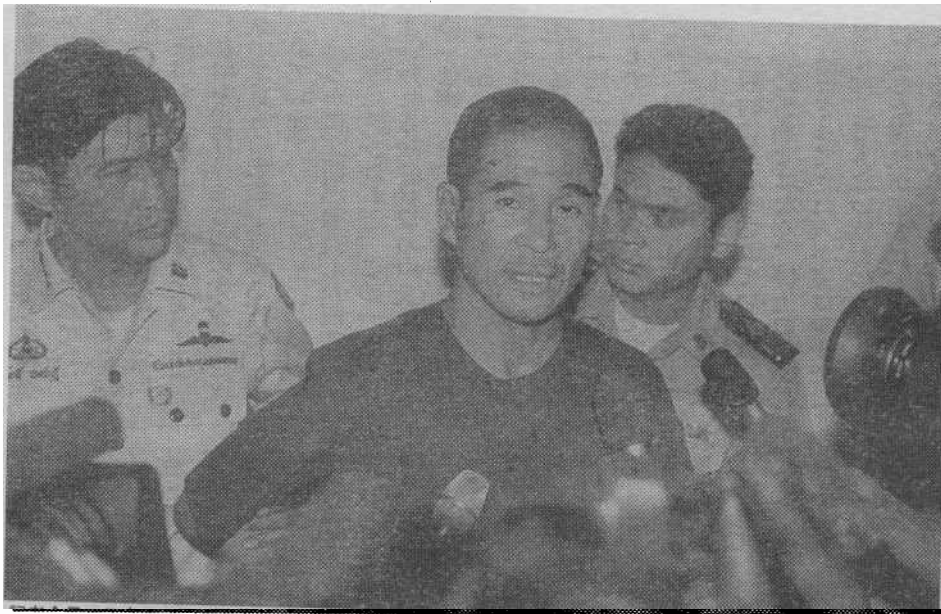
10

俠道界には社会の法律や秩序といったもの以前に独自の掟が存在するようですが、その価値基準は優劣の比較ではなく、破門、絶縁を伴う絶対的なものです。その掟の中心核を成しているのが、自分の共同体、仲間、親分のための義理といえます。さらにどこまでも自分個人の顔と実力で勝負していくのが俠道界に身を置く人達の究極の生き様のように思えます。

この俠道界の人は、それぞれに自分の命をかけて、失敗すれば長期の獄中生活を覚悟して「悪事」をやっているのですから、その原点におい

ては何か納得するものがあります。ところが紳士面をしている国家の高級官僚、巨大企業の御偉方は、国という威信を傘に、公的立場を巧みに利用して国家権力の支援を受けなが

ら法を無視し、数々の合法的悪事を働いているのです。そして、今の世が続く限り、一切の責任を問われることもなく、平然と生きのびていくのです。



記者会見で日本への帰国を表明する筆者／撮影・村上昭浩

の分割負担で帳消しにし、省をあげての「総懺悔」として片付けています。

これは第二次大戦を「国民総懺悔」として処理し、真の戦争責任をあいまいにし続けているわが国の支配者の歴史そのものであり、半世紀をゆうに過ぎても一貫して変ることのない権力者体質を見事に表現しています。もちろん外務省の中にも清廉潔白な人はいるでしょうが……。

こうして見ると、この世では何よりも悪人と思われている中にも実は人間性を守り輝かせようとしている人がいる反面、最高の紳士とされている人の中にとつてもない巨悪がいることをしっかりと見極めることが重要です。そして、その巨悪を誰かわからないように何をしているのか知られないように粉飾するのが、他でもなくわが国の支配機構の制度の重要な役割のひとつであるということです。

アウトローとしての共通性を持ちながらも俠道で生きる人と、いわゆる左翼、右翼として政治活動にたずさわる人の差は、善悪かではなく、人間として生きていくべき道をどのようになら実践しているのかの差のように思います。即ちまず己が自分

の仲間だけでも俠の道という生き方と、俠の道は結局、この不正に満ち、腐敗しきった現社会体制を根本的に改革するしかないという生き方の差だということです。

私が最後に俠道界の人々に伝えた気持は、『獄同塾通信』において浴田由紀子さんが、花岡康雄氏に投げかけていたその言葉、そのままです。

「その正義心と不正への怒りと勇気を：互いにこの社会の全ての人々を蝕む者達へこそ向けてほしいと願わずにはいられない。：同じ理不尽の故に外道になるしか生きる術を見出し得なかった弱き小さな者達をも一緒に生きのびる道こそ、求め続けてほしいと思う」

史上最悪の企業倒産、失業者があふれ出し、自殺者が急増していく未曾有の経済不況、官僚制度腐敗が極度に至り、小泉総理の「聖域なき構造改革」なる叫びのみが虚しく響く末世紀的時代状況の中で、川口塾長をはじめ志ある俠道界の人々が平成

の国定忠治として活躍し、その見事な生き様を花咲かせてもらいたいと願う次第です。また今の世の中は必ずそうした人材を生み出していくであらうことを心より確信しています。

☆ ☆ ☆

年末この文章を書いている時に川口和秀塾長の上告棄却の知らせが入りました。直ちに、励ましの手紙を書きながらも、やり場のない、こみあげる怒りをおさえることができません。

『獄同塾通信』九号に載っていた文章がしきりと頭をよぎります。「必ず『正義は勝つ』を信じ精いっぱい頑張つてほしいと思います」確かにその思想信念も大切です。と同時にこの世の中、今の社会では「正義は往々にして無視され、敗れる」という否定しえない現実をしつかり見

つめること、冷静に自覚することも大切ではないでしょうか。それゆえにこそ、やはり、必死の不退転の、背水の陣の闘争、努力が不可欠なの

であり、それは敗れても敗れても必ず勝利を目ざす、実現していく未来へと引きつがれていくと思うのです。

そして今度は、年明けに下獄を直前にした書信を塾長から受けとりました。

それは冤罪でありながら、権力により好き放題に籠絡され、ひいては更に長期獄中生活を強いられた者のみが書くことの出来る壮絶な内容のものでした。

長くはない手紙ですが、読みながらも字がゆがみ、曇ってゆき最後まで読めず、やっと読み終えました。「暴力団が権力団にリベンジしてやります。……私には終生、敗北はありえませんが……互いに社会人となつた折、ライフワークとして取り組もうではありませんか……」

柄にもなくこんな御粗末な文章を書いてしまいました。

「よど号」ハイジャック事件を敢行したその総責任者、故田宮高磨は、出発宣言を「我々はあしたのジョーである」で結びました。その真髄は、燃えつき白い灰になるまで闘い抜くということです。

我々九人の仲間、時代や状況が

一歩間違えば、俠道界を歩んだような人達でした。全員といってよいほど、高校時代は体育会系に属しています。野球、柔道、剣道、ラグビー、バスケット、水泳、ヨット……根性、意志の強さ、頑固さが皆に共通しています。

田宮は、ハイジャックの最後にお客様との「お別れパーティー」において、御迷惑をかけたことを詫びながら詩吟を朗じました。その時私は、彼という人間の根本は、義にあるのだということ強く感じた次第です。

私にとって師であり、兄であり、親分でもあった田宮がこうした文章を書いたなら、もつと面白く、内容のあるものを書けたのですが……。

(了)

獄中奇稿 究極の絆、永遠の友情のもと

嗚呼!!

任俠ボルシエビキ

